

## 研究報告

春名好重著

### 書評

#### 『古筆大辞典』

江上 綏

春名好重教授の『古筆大辞典』は、古筆研究家というより、日本書道の研究家、愛好家がひとしく待望するところであったが、昨秋、ようやく手にし得るに至り、その渴きを癒すこととなった。教授は、昭和二十五年に東洋書道協会から『古筆辞典』と題するA5版二四ページの辞典を公にされた。この種の辞書としては最初のもので、その後、昭和四十四年にA5版四八〇ページの同名の書を三彩社から出され、今回また、淡交社から、内容的にも量的にも拡大された形で、『古筆大辞典』を出版された。

昭和二十五年と言えば、終戦後の産業の復興も緒にいたばかりで、物資の不足もまだ続いていたところである。したがって、昭和二十五年の『古筆辞典』には、時節柄、写真版は含まれず、文字だけの書であった。これは、知識の整理には役立つが、美術品たる古筆に関する辞書としては、ややものたりなさを感じさせるものであるが、美術関係書といわず、他の分野においても、当時としては避けることのできないことであった。なお、巻末に、伝承筆者名を含む筆者名の索引と主要古筆筆者没年表が付されている。

昭和四十四年の三彩社版は、口絵を西本願寺本三十六人集の継紙のある華麗な石山切の写真が飾ったほか、文中にも多くの写真が入ることとなった。また、東洋書道協会版と同様、伝承筆者名を含む筆者名の索引が付されている。

昭和五十四年の淡交社版は、さらに項目や写真が増え、図版が一〇〇点余となったほか、伝承筆者名を含む筆者名の索引に加えて、古筆の内容分類索引が備わった。

項目数は、東洋書道協会版が約一〇〇〇、三彩社版が約一五〇〇、淡交社版が三〇〇〇余である。項目に関して、前二者と今回の淡交社版が異なる点は、前二者では項目はすべて古筆名であったが、今回の版では、古筆の名称だけでなく、古筆に関係のある人名、術語、概説的な関連項目などが含まれる。たとえば、「古筆」というような概説大項目は三彩社版まではないが、『古筆大辞典』では、二ページ半にわたって「古筆」の項が占め、「古筆切の名称」、「古筆手鑑」、「古筆の鑑賞」、「古筆の鑑定」、「古筆の鑑定法」、「古筆の効用」、「古筆の尊重」、「古筆の筆者」、「古筆の分割」、「古筆見」などの関連項目が続く。

「古筆」の語は、広義、狹義に、用法の幅があるが、あえて簡単にいえば、書として鑑賞の対象となり得る上手の日本の古い時代の肉筆書で、紙または絹綾に書いたものである。歴史的には、室町、桃山以来、この種の古い書の鑑賞の中で、この語の用法についての具体的な習慣ができあがっている。また、桃山、江戸時代の古筆見といわれる古筆鑑定家の鑑定が、古筆の分類大系、評価大系を形づくる上に大きな役割を果たしてきた。この分類大系、評価大系を基礎にして、今日の学問的成果をいかに合わせ用いるかというところに、現在の問題がある。たとえば、伝承筆者の問題についても、古筆見と呼ばれた人達にはそれなりの基準があり、今日の網羅的な研究により訂正される面が多くあるにせよ、研究の基礎を整えたという意味で、この人達の功績は大きい。古筆切の名称も、大体は、彼らの周辺でつけられた名称である。このような歴大対象を前に、古筆の研究というものは、先人の業績を十二分に活かすことなくして、何人も進め得るものではない。近時、特定の方法論に重きを置く余り、他の方法論を過小評価する言行が学問の世界にも見られないことはない。特に、若い

間は、結果をのみ急ぎかねない傾向が良かれ悪しかれ出やすいのはいかんとも  
しがたい。この『古筆大辞典』は、その意味でも、学問の深さを我々に教示す  
るところの多い書物である。春名教授の他の啓蒙的な著書、なかならず、古筆  
への入門概説書である『古筆』（昭和十八年、泰東書道院出版部）、古筆鑑賞の  
実際の手引き書である『古筆の鑑賞』（昭和四十六年、淡交社）などと、とも  
に読み味わうべきものであろう。

教授のように広い目でしかも焦点を定め、長く、一貫した道を歩んで研究し  
てこられた背景なしには、このような龐大な対象を扱った大部な著書をなすこ  
とは不可能であり、過去からの流れを堰きとめた貯水ダム、あるいは、学問の  
道程を示す里程標にもたとえることのできる書である。

このように、本辞書は類書を見ない大著であるが、何ごとも欲をいえばきり  
がない。たとえば、東洋書道協会版にあったような古筆筆者没年表やさらに関  
連事項を収めた年表があればというのが、私のような若輩のないものねだりで、  
実際には自分で勉強して自分の年表を作らなければならないことはいうまでも  
ない。

『古筆大辞典』春名好重編著。淡交社、昭和五十四年十一月十日初版発行。  
B5版。序、凡例、七頁。本文、跋、一、二五八頁。索引、三二頁。

（東京国立文化財研究所）